

李徳裕と平泉莊

二宮美那子

京都大學

一 はじめに

李徳裕（字 文饒、七八七―八四九）の名は、多くの場合、中晩唐期の著名な政治家、牛李の黨争の中心人物の一人として想起される。彼はまた、名高い園林、平泉莊の所有者でもあった。本論では、政治家として取り上げられることが多い彼の「私人」としての一面に注目し、従来取り上げられることの少なかった平泉莊に關する様々な作品を材料に、平泉という「園林」と李徳裕との關係を探ろうとするものである。中晩唐期の園林として大きな意味を持つ平泉莊と李徳裕の關係を考えることは、この時期の士大夫の、文化的背景や精神構造の一端を探ることにつながるのでは

李徳裕と平泉莊（二宮）

ないだろうか。

平泉とは、この地に別墅を持った李徳裕自身が、「靈泉賦 并序」〔別集卷九〕^①（開成元（八三六）年九月、洛陽・太子賓客分司）の序の部分で、

余林居西嶺、平壤出泉、廣不逾尋、而深則盈尺。自東鄰故丞相崔公至谷口故丞相司徒李公、凡別墅五六、皆謂之平泉、寔發源於此。

わたしは西の嶺に隱居住まいを構えたが、平らな土地からは泉が湧き出ており、その廣さは一尋を越えないが、深さは一尺を満たすほどである。東隣のもと丞相崔公の所から、谷の入り口のもと丞相司徒李公の所まで、別墅が凡そ五、六ヶ所あり、それらを全て平泉と呼ぶ。その泉の源は、ここなのだ。

と述べるように、また、同時代白居易が平泉に遊ぶ詩の中で、「嗟く所は地の都門を去ること遠くして、肩昇して毎日來るを得ざるを。」（題平泉薛家雪堆莊）二八六一・卷二八^②

と詠つたように、洛陽の郊外にある景勝の地、當時別墅が多く設けられていた、水の豊かな場所であった。

唐代の半ばから後半にかけて、均田制の崩壊に伴い、貴人や官僚たちが經濟的目的のために土地を購入し、莊園を營むことが盛んになっていった。^③「靈泉賦」序は、平泉がこのような目的に絶好の土地だったことも示している。李德裕が所有した平泉莊については、彼自身はその經濟的役割を明言しておらず、史料の上でそれと認めることも出来ない。しかし、その廣さや〔唐語林〕に周圍十餘里とある、彼自身の作品に平泉の田園風景の描寫が見られ、引退の場所として經濟的にも頼りにしていた様子が窺えることなどから、楽しみのための別莊としての性質と、經濟的収入を得る莊園としての性質、兩方を備えていたと見て良いだろう。^④つまり、李德裕にとって平泉莊とは、現實から、政治の世界から逃れる避難場所、「公」に對する「私」を解放する場でもあると同時に、収入源の土地＝莊園でもあったのである。莊園の持つ田園的雰圍氣はまた、傳統的な隱逸という概念を、現實においても支える役割を果たす。

ここで、唐代に至る園林史の流れを、周維權『中國古典園林史(第二版)』^⑤(清華大學出版社、一九九九年)の記述を借りて簡単に確認しておこう。園林は、その所有者によつて「皇家園林」「私家園林」「寺觀園林」に分けられ(第一章第二節「中國古典園林的類型」)、殷から漢にかけての「生成期」、魏晉南北朝の「轉折期」を経て、隋、唐に至つてその「全盛期」を迎える(同章第三節「中國古典園林史的分期」)。貴族や官僚が造る「私家園林」(本論で取り上げる平泉莊もこの區分に入る)が目立つようになってくるのは、「轉折期」にあたる魏晉南北朝である。この「私家園林」は、その造られる場所や性質によつて、さらに都市の中に造られる「城市園林」と郊外などに造られる「郊野別墅園」とに分けられる。「城市園林」の造園は北魏の洛陽などで盛んに行われていた。一方、「郊野別墅園」の代表的な例としては、西晉石崇の金谷園や、潘岳の莊園などが挙げられる。これらは、後世の別墅園林の草分け的存在といえ、生産、經濟の役割と、美しい自然環境をもつ庭園としての性格を兼ね備えたものであった(第三章「園林的轉折期——魏、晉、

南北朝」第三節「私家園林」。隋から唐初にかけて、長安と洛陽では、國力が盛んになるのに呼應するように「私家園林」の造園はますます盛んになった。官僚政治により臺頭した士大夫層は、個人の園林を造ることに積極的であった。官界で浮沈を繰り返す彼らに、園林での生活はしばしの開放感を與えた。園林は士大夫層の隱遁への欲求を満たす場となつたのである。また、山水文學の隆盛に後押しされるように、自然風景への深い理解と自然美の高度な鑑賞能力を備えた官僚たちは、自らの思想を造園藝術の中に注ぎ込んだ。白居易を代表格とするこのような士大夫たちは、後の文人造園家の雛形となつていく。^⑥

九派迄於海門、江山景物之狀。竹間行徑有平石、以手磨之、皆隱隱見雲霞、龍鳳、草樹之形。……初德裕營平泉莊、遠方之人多以異物奉之、有題平泉詩曰、「隴右諸侯供語鳥、日南太守送名花。」

李德裕の、東都の平泉莊は、洛陽を去ること三十里、草木や臺たいの様子は、まるで仙人の住處に辿り着いたかのようだ。欄干の向かいには泉の水を引き、あちこち廻つては地を穿ち、巫峽、洞庭の十二峰を廻る九條の流れが海にまで至る、その山河の景色をかたどっている。竹林をぬう小道には平らな石が置いてあり、手で磨くと、それらはすべて彩雲、龍や鳳凰、草や木の姿をほんやりと浮き上がらせるのである。……德裕が平泉莊を營み始めるのと、遠方にある人々は、度々珍しく不思議なものを彼に献上した。平泉を詠った詩に言う、「隴右の諸侯はお喋りする鳥を捧げ、日南の太守は名高い花を贈る」と。

李德裕東都平泉莊、去洛城三十里、弁木臺榭、若造仙府。有虛檻對引泉水、縈回疏鑿、像巫峽、洞庭十二峰、

このエピソードは、當時の權力者の庭園のありようの一端と、人々の好奇心の在處との、兩方を示している。南方の

廣大な風景を再現し、そこには摩訶不思議な奇石がちりばめられ、地の果ての官僚たちから贈りものが集まってくる。南方の風景と奇石趣味とが贅澤な庭の構成要素として取り上げられていることも興味深い。洛陽を去ること三十里の場所にある平泉莊は、「仙府（仙人の住む場所）」、現實と隔絶された異世界めいたものと捉えられている。人工の粹を集めた豪華な庭園は、權力の絶頂期にある者にしか造り得ない究極の贅澤だった。しかし、平泉莊を詠った李徳裕自身の詩、つまり彼自身の言葉で語られた平泉莊の姿に目を移すと、このように人々の好奇心に曝されがちな、金と權力によって手に入れた贅澤さだけでは語れない一面もまた見えてくる。もちろん『劇談録』の記述もまた、李徳裕自身の奇石蒐集などの贅澤な趣味と、集めた石を取り上げた詩編などを背景として生まれたとは言えるだろう。しかしまた一方で、李徳裕の描いた平泉の風景には、このような物質面での充實、あるいは人工物の集積地としての風景とはかけ離れた、自然や田園風景の持つ豊かさがあることもまた事實である。残された多くの詩文には、李徳裕が平泉

に託した様々な理想や要求が表現される。その姿は、物質的な面のみを強調して描き出された『劇談録』の「仙府」とは、はつきりと一線を畫しているのである。

二 「故郷」平泉

李徳裕が平泉を主題にして詠んだ詩（本論では便宜上「平泉詩」と呼ぶ）は、およそ三十首残されている（うち、六首の連作一、十首の連作三、二十首の連作一を含む）。その他の詩およそ五十首に對して、連作の数も入れると残された詩の半数以上を平泉に關わる詩が占めることになる。このように大量の詩が残されてはいるのだが、詩句や詩題の中に時代を同定する手がかりが表れにくいいため、制作年代がはっきり分かるものは少ない^⑧。彼の平泉詩全てを、時系列に従い人生と結びつけて讀むことは不可能ではあるのだが、中にはもちろん制作年代が分かるものもある。平泉莊を造營する前後の時期の作品もその中の一つである。次に擧げるのは、平泉の總合的なイメージを、はつきりと外部に向けて詠った数少ない作品である。

近於伊川卜山居、將命者畫圖而至、欣然有感、聊賦此詩、兼寄上浙東元相公大夫使求青田胎化鶴 乙巳歲作〔別集卷九〕

近ごろ伊川に山居を卜し、將命者の圖を畫きて至る、欣然として感ずる有り、聊か此の詩を賦し、兼ねて浙東元相公大夫に寄上し青田の胎化鶴を求めしむ 乙巳の歳作る^⑨

弱歲弄詞翰

弱歲にして詞翰を弄び

遂叨明主恩

遂に明主の恩を叨くす

懷章過越邸

章を懷きて越邸に過ぎり

建旆守吳門

旆を建てて吳門を守る

西圯陰難駐

西圯陰 駐まり難きも

東臯意尙存

東臯 意は尙お存す

慙逾六百石

六百石を逾ゆるを慙じ

愧負五千言

五千言に負くを愧す

寄世知嬰繳

世に寄せては嬰繳するを知り

辭榮類觸藩

榮を辭しては觸藩に類す

欲追縣上隱

縣上の隱を追わんと欲す

況近子平村

況んや子平の村に近きをや

邑有桐鄉愛

邑には桐郷の愛有り

山餘黍谷暄

山には黍谷の暄かきを餘す

既非逃相地

既に逃相の地に非ざれば

乃是故侯園

乃ち是れ故侯の園なり

野竹多微逕

野竹 微逕多し

岩泉豈一源

岩泉 豈に一源ならんや

映池方樹密

池に映えて方びし樹は密なり

傍澗古藤繁

澗に傍いて古き藤は繁し

邛杖堪扶老

邛杖 老いを扶くに堪え

黃牛已服轅

黃牛 已に轅に服す

只應將喚鶴

只だ應に喚きし鶴と將に

幽谷共翩翩

幽谷 共に翩翩たらん

「乙巳歲」は寶曆元（八二五）年、李德裕三九歳の頃の作品である。この時、李德裕の官は浙西觀察使（詩中では「旆を建てて吳門を守る」と詠われている）。李德裕は、宰相

李逢吉により中央から遠ざけられ、長慶三（八二三）年から足かけ八年の長きに亘って浙西觀察使として過ごしていた。史書には、李逢吉が徳裕の聲望を疎んじ、牛僧孺を重用しようとしたことが記されている。詩題の「將命者の圖を畫きて至り」とは、平泉の別墅の設計圖のようなものを指すのだろうか。^⑩この時期に李徳裕は平泉莊を建設しつつあつたようである。「浙東元相公大夫」は、當時浙東觀察使であつた元稹を指す（詩中では「章を懷きて越邸に過ぎり」と詠われている）。「青田」は鶴の産地として有名であつた土地名。「胎化鶴」は不明だが、當時高名な鶴の種類であろうか。

詩はまず、自分の士人としての軌跡を述べ、仕官の身上だが「東皋の意は尙お存す」、隱逸の願いを捨てていないことに觸れる。自分の生涯を振り返りながら手に入れた土地へ言及するこのような作品は、慰安の地を得たことの宣言ともとれよう。隱逸の地というイメージをふんだんに帯びた平泉は、「邑むらには桐郷の愛有り、山には黍谷の喧かきを餘す。」と、漢代の朱邑、鄒衍の故事を踏まえ、民の

敬愛の念に満ちた豊饒な土地として表現される。また、水源に富み植物の繁茂する、野趣を備えた綠豊かな土地としても描かれている。このように、田園地帯と山水、兩方の美質を兼ね備えることが、「郊野別墅園」の特徴でもあつた。李徳裕はこのころ、先にも述べたように地方に追いやられていたのであり、詩にもその状況が反映されてか仕官と隱逸の間で搖れる心境が詠まれている。「既に逃相の地に非ざれば、乃ち是れ故侯の園なり。」^⑪と云うのは、引退した後のわが身を養うための場所だ、というほどの意味であろう。しかしまた「故侯」には、將來の自己のみならず、中央から遠ざかり失意の中にある自己を投影した、屈折した感情が込められているようにも思われる。「乃ち是れ故侯の園なり」句と同様、「邛杖 老いを扶たすくに堪え」と云うのもまた、生計の助けとなる莊園であることからの連想だろう。老いた體を支える杖は、仕官を辭めてからの經濟的助けとなる平泉莊を、暗に示唆しているかのようだ。

平泉を手に入れた時期について言及がある文章には他に、開成五（八四〇）年、徳裕五四歳の頃の作とされる「平泉

山居戒子孫記」〔別集卷九〕がある。以下はその前半部である。

經始平泉、追先志也。吾隨侍先太師忠懿公、在外十四年、上會稽、探禹穴、歷楚澤、登巫山、遊沅湘、望衡嶠。先公每維舟清眺、意有所感、必凄然遐想、屬目伊川。嘗賦詩曰「龍門南岳盡伊原、草樹人烟目所存。正是北州梨棗熟、夢魂秋日到郊園。」吾心感是詩、有退居伊、洛之志。

前守金陵、於龍門之西、得喬處士故居。天寶末避地遠遊、鞠爲荒榛。首陽翠岑、尙有薇蕨。山陽舊徑、唯餘竹木。吾乃剪荆莽、驅狐狸、始立班生之宅、漸成應叟之地。又得江南珍木奇石、列於庭際。平生素懷、於此足矣。

平泉を營まんとしたのは、先代の志を繼いだのである。私は我が父忠懿公に隨つて、都を離れること十四年を數え、その間會稽山に上り、禹穴を探り、楚澤を經、巫山に登り、沅水、湘水に遊び、衡山を望んだ。亡き父は舟を繋ぎとめて廣々とした水面を眺めわたす度、心中感じ

るものがあるらしく、そのような時は必ず悲しげに思いを馳せて、伊川の方へ視線を注ぐのであった。父は嘗て詩を賦してこう言つた。「龍門山の南岳が伊川の平原に盡きるあの場所の、草木や人家の煙は今でも臉に残つてゐる。北方ではちょうど今、梨や棗が熟すころだろう。秋の日、夢の中で私の念いは彼の園林に到るのだ。」私は心中この詩に感動し、伊洛の地に隱居するという志を持つようになったのである。

以前金陵に赴任したとき、龍門山の西に、喬處士という人物が昔住んでいた家を手に入れた。天寶年間の末に亂を避けてこの土地を離れ、あちこち旅をしている内に、土地は伸び放題の榛はげに閉ざされてしまった。首陽山の翠の嶺には、なお蕨薇が生えていた。山陽縣の古道には、唯だ竹木が残るのみであった。そこで私は群がり生えたいばらを刈り、狐狸を追い拂い、まずは班固の住居のように、父が選んだ地に善き住まいを建て、それを次第に應璩が得た隱遁の土地のように仕立て上げていった^⑬。更に江南の珍木奇石を集めては、庭の端に並べた。かねて

からの願いは、このようにして満足させることが出来た。^⑬

ここでは、平泉に別墅をもったのは、「先志を追う」、つまり父李吉甫の影響であり、父の意向を尊重し、敬う気持ちからである、と述べられている。續く部分では、手に入れた土地を隱逸の場所として造り替えていったことを、典故を多く借りて表現しているが、「又た江南の珍木奇石を得、庭際に列ぶ。」と、自分の趣味に叶う場所としたことにも言及している。

李德裕の父吉甫が、地方を轉々としつつも常に伊洛の土地を思慕したのは、彼の一族が德裕の祖父李棲筠の時代に中央への仕官を始め、河北趙郡から京洛の地に移り住み、その墓地が洛陽付近に移されたことなどによるだろう。洛陽城内での住居の状況は不明であるものの、洛陽は李氏にとって新たな故郷となりつつあったのである。^⑭

ところで、吉甫の詩は、李氏が既に洛陽付近に土地（「夢魂 秋日郊園に到る」と言う「郊園」は、私的な所有地を指すように思われる）を所有していたことを思わせる。「舊

唐書」卷一七四李德裕の本傳では、平泉別墅を得て、仕官する前はそこで學問をしていた、という記述がある（『新唐書』にはこの記述はない）。一方、「平泉を手に入れた」と詠われる先に擧げた「近於伊川……青田胎化鶴」詩が作られたのは、仕官してから既に十年以上経過した時期である。つまり、『舊唐書』と「近於伊川……青田胎化鶴」詩では、平泉を「手に入れた」とする時期に大幅なずれがあることになる。しかしこれは、祖父が洛陽に移つてきたときに、既に土地を手に入れており、李德裕がその地に新たに別荘を建て、そのことを改めて「卜山居」と言つただけとも考えられる。祖父、父の土地所有に關する史料がないので断定はできないが、平泉という土地への思い入れの強さを考えると、傳來の土地があつたと考えた方が納得がいく。ともあれ、洛陽の地に移り住んでから二代を經、更に父の伊洛の土地への思慕を目的に「歸る」場所——抽象的な意味においても、具體的にも——として意識されていたのであろう。また、平泉莊を造るということは、現實において

は、經濟的基盤を固め、役人勤めを辭めた後の暮らしの保障を得たということでもある。それは文學表現の上では、「隱遁のための住まいを手に入れた」と表現される。平泉莊は李德裕にとって、精神的且つ經濟的な支えであった。

しかし、李德裕が平泉を訪れることが出来たと分かる時期はごく短く、またその期間は非常に短かった。¹⁸ 李德裕が平泉に滞在して詠んだと思われる詩は、十首に満たない。以下、李德裕が平泉莊にあつて作ったとされる詩を見ていこう。まずは、開成元（八三六）年、太子賓客分司東都となつて、三ヶ月間洛陽に滞在したときの作品とされるものを挙げる。

初歸平泉過龍門南嶺遙望山居 卽事 「別集卷十」

初めて平泉に歸り龍門の南嶺を過ぎて遙かに山居を

望む 卽事

初歸故鄉陌 初めて歸る故郷の陌

極望且徐輪 極望して且く輪を徐ましましむ

近野樵蒸至 近野 樵蒸至り

李德裕と平泉莊（二宮）

平泉煙火新 平泉 煙火新たなり

農夫饋雞黍 農夫 雞黍を饋め

漁子薦霜鱗 漁子 霜鱗を薦む

惆悵懷楊僕 惆悵として楊僕の

漸爲關外人 關外の人たるを漸ずるを懷う

詩からは、地方を轉々とし、ようやく歸ることが出来た懐かしの地を遙かに見遣りながら、じっくりと喜びをかみしめる様子が傳わってくる。人々の穏やかな日常が感じられる田園風景、收穫を差し出してもなす農夫や漁師たち。このように人々の様子や暮らしぶりが温かく好意的に描かれるのには、自分の所有地である平泉に辿り着いたという安堵の気持ちも強く作用しているだろう。結句の「惆悵として楊僕の、關外の人たるを漸ずるを懷う。」という二句は、武人として數々の功績を挙げた楊僕（『漢書』卷九十 酷吏傳）が、自分の住まいが關外に有ることを恥じて、上書して財産を投じ東關を移動させた故事を踏まえている。¹⁹ 李德裕は、現狀に満足できず、自分の住まいを關中に象徴され

る「中央」の傘下に入れんと盡力した楊僕のあり方を、憐憫をもって捉えている。楊僕は地方住まいを恥じたけれども、自分はどうかだろうか。今眼の前に広がる風景、懐かしい「故郷」に歸ってきたことに、十分満足することができののだ。平泉という「自分の領域」に囲まれて、詩中の意識は内向きに収束していく。

この詩を作る以前の大和九（八三五）年、李徳裕は、病氣の文宗のご機嫌伺いをしなかつたという「不敬罪」などによって、袁州長史に左遷された。これは、李宗閔らと鄭注、宦官たちの共謀によるでつち上げだったらしい。李徳裕はこの袁州長史時代、更に滁州刺史時代を経て、太子賓客分司東都となつたわけだが、都に近付いたとはいえ未だ中央復歸を果たすことは出来ず、不遇感をぬぐい去ることは出来ていなかったはずである。太子賓客分司東都という職は、名譽職ではあるが閑職であり、働き盛りの年齢である上に、中央で働くことを望んでいる者にとつては、決して満足いくポストではなかつたはずだ。そのような状況を考えると、この詩には、中央との訣別と言うよりはむしろ、

中央に未練を残す自己への慰撫——強い言葉で言えば、未練という感情からの避難——が感じられるようにも讀める。一つの價值觀を捨てざるを得ないとき、また別の價值觀を強く意識せざるを得ないのは、自然な心理の流れである。②ともあれ李徳裕は、詩の上では都を思い中央を思うといった、公人としての意識に繋がる行爲にはあくまで未練を残していないかのように詠っており、平泉にあつて政界の呪縛から軽々と解放されているかのようである。同じく開成元（八三〇）年の作。

潭上喜見新月〔別集卷十〕

潭上 新月を見るを喜ぶ

簪組十年夢 簪組 十年の夢

園廬今夕情 園廬 今夕の情

誰か憐れまん故郷の月の

復映碧潭に映りて生じるを

皓彩松上見 皓彩 松上に見われ

寒光波際輕 寒光 波際に輕し

還將孤賞意 還た孤賞の意を將つて

暫寄玉琴聲 暫く玉琴の聲に寄せん

この詩には、内容以外に平泉を詠つたものと断定できる要素はないのだが、詩に表れた情感は、李徳裕が残した一連の平泉詩に並べるに相應しい。「簪組」つまり官僚生活は「十年の夢」、今振り返ってみれば實體を失つたかのよう
に遠のき、「園廬」つまり現在この我が身がある田園や住まいにこそ、重みと充實感をもつた「今夕の情」がある。——ここでは官僚生活が過去の幻として追いやられている。李徳裕にとつて平泉は、官僚生活と對置される場所として強い磁場を持つており、二つの場所は一方が現實となれば他方は夢となる、表裏一體の關係にあることが表されている。「孤」である時間が流れることもまた、隱逸生活の表現として重要な要素の一つに數えられるであろう。碧潭に映える新月は、それが慕わしい土地のもの、「故郷の月」であるからより一層美しく、愛すべき存在として描かれている。

李徳裕と平泉莊(二宮)

このように、平泉は李徳裕にとつて、獨りになって自己を觀照する場であり、官僚生活という現實を忘れさせる場であつた。それは、懐かしく居心地の良い歸るべき故郷、終の棲家として、公の世界と表裏の關係をなしていたのである。

三 平泉の風景

李徳裕の平泉詩はその性質上制作年代を確定することが出來ず、背景が曖昧なまま讀まざるを得ないことは既に述べた。これらの平泉詩は、取えて分類するならば、石や植物などを詠んだ詠物詩的なものと、風景や風物を描いた敘景詩とに大別できる。この章では、敘景詩を取り上げながら平泉の風景がどのように描かれたのかをみていく。

李徳裕が平泉を訪れることができたのは、ごく短い期間であつたと考えられる。平泉をテーマとして詠んだ敘景詩の殆どは、「憶」「懷」「思」などの文字を詩題や詩句に含み、遠方から平泉を思い詠んだもの、想像によつて風景を描いたものという枠組みが示されている。

先に述べたような事情によつて左遷された袁州で、李徳裕は平泉を思う詩を數首殘している。うち一首を擧げよう。

夏晩有懷平泉林居 宜春作〔別集卷九〕

夏の晩 平泉の林居を懷う有り 宜春の作

孟夏守畏途 孟夏 畏途を守り

捨舟在徂暑 舟を捨てては徂暑に在り

愀然何所念 愀然たり何の念う所ぞ

念我龍門塢 我が龍門の塢を念う

密竹無蹊徑 密れる竹に蹊徑無く

高松有四五 高き松は四五有り

飛泉鳴樹間 飛泉 樹間に鳴り

颯颯如度雨 颯颯たること度雨の如し

菌桂秀層嶺 菌桂 層嶺に秀で

芳蕪媚幽渚 芳蕪 幽渚に媚し

稚子候我歸 稚子 我の歸るを候ち

衡門獨延佇 衡門 獨り延佇す

誰言聖與哲 誰ぞ言わん聖と哲と

曾是不懷土 曾て是れ土を懷わざると

公旦既思周 公旦 既に周を思い

宣尼亦念魯 宣尼 亦た魯を念う

矧余竄炎裔 矧んや余 炎裔に竄るれば

日夕誰晤語 日夕 誰と晤語せん

眷闕悲子牟 闕を眷みて 子牟を悲しみ

班荆感椒舉 荆を班きて 椒舉に感ず

悽悽視環玦 悽悽として環玦を視

惻惻步庭廡 惻惻として庭廡を歩く

豈待莊寫吟 豈に莊寫の吟を待たんや

方知倦羈旅 方に知る羈旅に倦むを

詩の前半では平泉の描寫が繰り廣げられ、それが後半、自己の境遇への嘆きへと繋がっていく。平泉は詩中で「我龍門塢」と呼ばれる。夏の終わり、未だ暑さが残っている不快な季節に、平泉には緑がこんもりと茂り、瀧の音が涼やかに響いているだろう。香草は美しく秀で、自分の歸りを待っている人がいるはずだ——平泉は、自然が與えてくれ

る心地よさや植物に託された精神性に彩られ、何時でも自分を迎えてくれる暖かさを備えた、懐かしくも美しい別天地として描かれている。同じ時期に書かれたとされる「早秋龍興寺の江亭にて閑眺し龍門の山居を憶う 崔張舊從事に寄す 宜春の作」詩〔別集卷九〕では、

江亭感秋至 江亭 秋の至るに感じ

蘭徑悲露泣 蘭徑 露の泣るを悲しむ

杭稻秀晚川 杭稻 晚川に秀で

杉松鬱晴嵐 杉松 晴嵐に鬱たり

嗟予有林壑 嗟あ 予れ 林壑有り

茲夕念原衍 茲の夕 原衍を念う

綠篠連嶺多 綠篠 嶺に連なりて多く

青莎近溪淺 青莎 溪に近くして淺らなり

淵明菊猶在 淵明の菊は猶お在り

仲蔚蒿莫剪 仲蔚の蒿は剪ること莫し

喬木粲凌苕 喬木 凌苕 粲き

陰崖積幽藓 陰崖 幽藓 積む

遙思伊川水 遙かに思う伊川の水の

北渡龍門峴 北のかた龍門の峴を渡るを

蒼翠雙闕間 蒼翠たり雙闕の間

逶迤清灘轉 逶迤として清灘は轉ず

故人在鄉國 故人 鄉國に在り

歲晏路悠綽 歲晏くして路は悠綽たり

惆悵此生涯 惆悵たり此の生涯

無由共登踐 共に登踐するに由し無し

秋の實りの景色を眺めることが、今は遠く離れている故郷を懐かしみ、自己の境遇を悲しむ気持ちに繋がっていく。

王粲「登樓賦」の、「雖信美而非吾土」という慨嘆を連想させるが、眼前の風景は「登樓賦」と異なり五、六句目を境に一轉平泉の描寫へと變質し、まるで風景が眼前にあるかのような描寫が續く。それらの描寫は、「夏晚有懷平泉林居 宜春作」詩と同じく美しい自然風景であり、また「淵明の菊」や「仲蔚の蒿」が無くなつてはいないと、平泉という場所の持つ精神的な意味、隱遁の場所として變わ

らず存在し續ける慕わしさが表現されている。點景から平泉全體のイメージの描寫に移る後半部では、伊川の清らかな水が青々とした龍門山の麓を流れていく様が、親しい人を感じる感情へと自然につながっている。

上の二首ともに、平泉の様子を思い起こし詩にすることは、一時の慰めとなつてゐる。不快な暑さや孤獨、政治的に不遇の状態に在るとき、平泉は自分に變わらず手をさしおいてくれる安らぎの場所なのである。しかしそこはまた、手を伸ばしても決して届かない、今現在の姿を描きながらも自分から最も遠い場所にある理想郷でもあるのだつた。

さて、平泉を詠んだ詩の中で目立つのは、二十首、十首などの連作である。これらの連作は全て五言律詩で書かれ、平泉の風景や石、植物、人物など様々なものが取り上げられてゐる。數多く作られた連作の中でも、「憶平泉雜詠」十首〔別集卷十〕は、その殆どに「春」の一字が使われており、平泉の春への憧憬を主題として比較的構成に一貫性がある。この連作には詩題全てに「憶」という字が用いられて、「初めて暖かくなりしを憶う」「寒梅を憶う」「晩の眺

めを憶う」などと、平泉の春の風物が種種取り上げられてゐる。うち、七首目と十首目の二首を引いてみよう。

憶春雨

春の雨を憶う

春鳩鳴野樹	春鳩	野樹に鳴き
細雨入池塘	細雨	池塘に入る
潭上花微落	潭上	花 微かに落ち
谿邊草更長	谿邊	草 更に長し
梳風白鷺起	風を梳 <small>くし</small> りて	白鷺起ち
拂水綵鴛翔	水を拂 <small>はら</small> いて	綵鴛翔ぶ
最羨歸飛燕	最も羨む	歸り飛ぶ燕の
年年在故郷	年年	故郷に在るを

はとが樹間で鳴き、細かい春の雨が池に降り注ぐ。その雨と重なりあうように、水中には花がはらはらと落ち、谷川に沿って生える草は雨に促されたかのようにぐんと長くなる。風を梳るように、白い鷺がさっと飛び立ち、色あざや

かな羽で水をきつて鴛が飛んで行く。このような美しい風景を思い描く私は、渡り鳥である燕が毎年故郷に歸れることが、どんなに羨ましいことか。いずれも視覚的でありながら、細やかな水の音が常に聞こえてきそうな微細な表現が並んだ後、ふるさとに歸れない現實が思い起こされ嘆きへとつながる。

憶春耕

春耕を憶う

郊外杏花坼	郊外	杏花坼 <small>ひら</small> き
林間布穀鳴	林間	布穀鳴く
原田春雨後	原田	春雨の後
谿水夕流平	谿水	夕流平らかなり
野老荷蓑至	野老	蓑を荷いで至り
和風吹草輕	和風	草を吹きて輕し
無因共沮溺	沮溺と共に	
相與事巖耕	相い與に巖耕を事とするに因し無し	

李德裕と平泉莊（二宮）

街から外れた郊外に杏の花がほころび、林では種蒔きを告げる鳥、布穀が鳴いている。平野に廣がる田んぼにはちょうど春の雨が上がつたところ、谷川の水はこの夕べ、靜かに流れてゆく。農夫の老人が蓑を背負いやつて来て、柔かい風は草を輕やかに撫でて吹く。そのような光景を思い描く我が身はといえば、古代の隱者、長沮桀溺と共に、山中で畑を耕して暮らす術を持たないのだ。柔らかく濕つた春の風が、春の花や土の香りと混じつて感じられるようなのどかな風景。この詩でもまた、春の佳き日を描いた一枚の繪畫の登場人物になり得ない我が身が嘆かれている。

ちなみに、同連作中の「憶野花」詩では、詩題注に「余未だ嘗て春に故園に到らず」とあり、詩句に「洛陽の道に遊ぶと雖も、未だ故園の花を識らず」とある。これらが事實とするならば、詩題の「憶」字は過去の經驗の回想ではなくて、空間的に隔たった今現在を思い描く、という意味で用いられていることになる。一連の敘景詩では、平泉の暮らしの一こまが李德裕の「いま」と同じ流れの中で切り取られており、五感を十分に働かせた、活き活きとして細

やかな描寫が繰り廣げられるのである。

次に、同じく連作だが、風景や人物など様々なものを取り上げ氣ままに連ねたという印象がある、「思山居一十首」

〔別集卷十〕の九首目を舉げてみよう。²³⁾

憶村中老人春酒 有劉、楊二叟善釀

村中の老人の春の酒を憶う 劉、楊二叟の善く釀す有り

二叟茅茨下

二叟 茅茨の下

清晨飲濁醪

清晨 濁醪を飲む

雨殘紅芍藥

雨は紅の芍藥を残さない

風落紫櫻桃

風は紫の櫻桃を落す

巢燕銜泥疾

巢燕 泥を銜んで疾く

簷蟲掛網高

簷蟲 網を掛くこと高し

閑思春谷事

閑ろに思う春谷の事

轉覺宦途勞

轉た覺ゆ宦途の勞

二人の老人が粗末な小屋の下におり、すがすがしい朝に、

自分たちが作ったどぶろくを飲んでゐる。折から降つてきた雨があたり芍藥をそこない、春の風は櫻桃の花を吹き落としてしまう。巢を作るのに忙しい燕は泥を口に含んでさあつと飛んでいく。軒に住むクモは網を高いところに掛ける眞つ最中である。そのような春の谷のことを思つてゐると、ふと今いる現實の重み、役所勤めの苦勞がずしりと感じられる。ゆったりと流れる老翁たちの長閑な時間と、花々の利那的なあでやかさの對比、その中でそれぞれ春の營みに忙しい生命力あふれる生き物たち。ここでの春の風景もまた、李徳裕自身を疎外しつつあくまでも心地よい。この詩の七、八句目にある、夢想から現實への轉落とその落差から生まれる嘆きは、他に擧げた詩からも分かるように繰り返し見られる表現であり、平泉詩における基本的結構といつても良いほどである。このように、詩作の中ですら現實のくびきから完全に逃れようとはしなかつた李徳裕の詩からは、李徳裕と政治の世界との結びつきの強さをも讀みとることが出来る。二章で見た、官界と對置される場としての平泉に浸りきつたような表現は、平泉に「歸つ

て」いたからこそ生まれ得たものと言えるだろう。李徳裕にとつて、遠い場所から平泉のいまを憶い詠うことは、嘆きや羨望、絶望につながざるを得ない。しかしだからこそ、自分が缺けているその場所は、より美しく、慕わしい地として表現される。過去の回想が殆ど見られない、自分と同時進行のいまを描いた一連の平泉詩には、手で摺めるような觸感やリアルさがある。しかしその描寫の裏側には、手の届かない理想や夢といったものもつ甘さ、優しさが多分に含まれていることをもまた、感じ取ることができるのである。

冒頭に引いた『劇談録』の記事が描き出すごく人工的な姿は、この後見ていくように、平泉莊のある側面を捉えていることは確かである。一方でまたこのように、美しく平凡な——これらの紋景詩は時代の枠を越えた獨特の美意識を形成しているとはいえないだろう——ユートピアとしての春景も、李徳裕の理想郷のあり方の重要な要素として存在していた。

これらの平泉詩には、夏の初め（首夏清景想望山居 送

李徳裕と平泉莊（二首）

幕僚「初夏有懷山居」、雪が降つて（近臘對雪有懷山居）「晨起見雪憶山居」など、折々の季節の變化に觸發されて詠まれたものも多い。この背景の一端を示すと思われる詩を、この項の最後に擧げる。

山信至說平泉別墅草木滋長、地轉幽深、悵然思歸復
此作〔別集卷十〕

山信至りて平泉の別墅の草木滋まます長じ、地轉うた幽
深たるを説き、悵然として歸るを思ひ此の作を復す

忽聞樵客語 忽として樵客の語るを聞けば

② 暫慰野人心 暫く野人の心を慰めしむ

幽徑芳蘭密 幽かけき徑に芳蘭は密なり

閑庭秀木深 閑かなる庭に秀木は深し

麝麋來澗底 麝麋 澗底に來りて

鳧鵲遍川潯 鳧鵲 川潯に遍ねし

誰念滄溟上 誰ぞ念わん滄溟の上に

歸歎起歎音 歸歎 歎音を起すを

詩題の「山信」とは、山から來た使者、すなわちここでは平泉から來た使者のことであり、詩題は山から來た使者の知らせに對して返した作、という意味だろう。この詩題から推察するに、恐らく、主人不在の間平泉の管理を任されている役目の者があつて、彼が定期的に平泉の様子を伝える、といったことが行われていたのではあるまいか。一句目の「樵客」とは使者のことを、二句目の「野人」とは李徳裕のことを指すのであろう。先ほど擧げた「憶村中老人春酒」詩も、春の便りと共に老人たちの造った酒が李徳裕のもとに届けられたと想像したらどうだろうか。李徳裕の平泉詩は、季節折々に平泉から届けられた便りをよすがに作られたものであり、使者によつて平泉の様子が李徳裕に伝えられることが、平泉の現在をいきいきと詠った詩が生まれてくる、一つの背景になつていたのでないだろうか。

四 趣味の集積地

(1) 石、植物

冒頭で、「劇談錄」に載せる平泉を詠った詩、「隴石の諸

侯は語鳥を供じ、日南の太守は名花を送る。」を引用したが、このような詩が作られた背景には、李徳裕が各地の珍しい植物や石を集めるのに非常に熱心であつたということがある。宋・張洎（九三三—九九六）『賈氏談錄』〔別集卷十 諸書載平泉花木〕にはこうある。

贊皇公平泉莊、周圍十里、構臺樹百餘所、今基址猶存。天下奇花、異草、珍松、怪石、靡不畢致其間。故徳裕自製「平泉草木記」。

贊皇公（李徳裕）の平泉莊は、四方十里、高臺を百カ所あまり構え、その址は今でも遺されている。天下の珍奇な花、變つた草、珍しい松や奇怪な石は、その中に餘すところ無く取り寄せた。そこで徳裕は、自ら「平泉草木記」を作つた。

「其の間に、畢く致さざる靡し」とは誇張した表現であらうが、李徳裕の草花や石にかける情熱には、後世に取り沙汰される程の並々ならぬものがあつたようである。『賈氏

談録』にも言われているように、彼は自ら「平泉山居草木記」〔別集卷九〕を著し、集めた草木や石などを記録している。また、彼の平泉詩、特に連作の詩の中には、集めた石や植物、動物や大魚の骨を詠んだ、詠物的な詩が数多く残されている。まずは「平泉山居草木記」を引き、そこに記録されたコレクシヨンの数々を見てみよう。

余嘗覽想石泉公家藏藏書目、有『園庭草木疏』、則知先哲所尚、必有意焉。余二十年間、三守吳門、一蒞淮服。嘉樹芳草、性之所耽、或致自同人、或得於樵客、始則盈尺、今已豐尋。因感學『詩』者多識草木之名、爲『騷』者必盡蓀荃之美、乃記所出山澤、庶資博聞。

木之奇者、有天台之金松、琪樹、稽山之海棠、榧、檜、剡溪之紅桂、厚朴、海嶠之香檉、木蘭、天目之青神、鳳集、鍾山之月桂、青鸞、楊梅、曲房之山桂、溫樹、金陵之珠柏、欒荆、杜鵑、苜山之山桃、側柏、南燭、宜春之柳柏、紅豆、山櫻、藍田之栗梨、龍柏。其水物之美者、荷有蘋洲之重臺蓮、芙蓉湖之白蓮、茅山東溪之芳蓀。復

有日觀、震澤、巫嶺、羅浮、桂水、嚴湍、盧阜、漏澤之石在焉。其伊、洛之名園所有、今並不載。豈若潘賦「閒居」、稱郁棣之藻麗、陶歸衡宇、喜松菊之猶存。爰列嘉名、書之於石。

己未歲、又得番禺之山茶、宛陵之紫丁香、會稽之百葉木芙蓉、百葉薔薇、永嘉之紫桂、蕨蝶、天台之海石楠、桂林之俱郛衛。台嶺、八公之怪石、巫山、嚴湍、琅邪臺之水石、布於清渠之側。仙人跡、鹿跡之石、列於佛榻之前。是歲又得鍾陵之同心木芙蓉、剡中之眞紅桂、稽山之四時杜鵑、相思、紫苑、貞桐、山茗、重臺薔薇、黃槿、東陽之牡桂、紫石楠、九華山藥樹、天蓼、青瞞、黃心栳子、朱杉、龍骨。

□□庚申歲、復得宜春之筆樹、楠稚子、金荆、紅筆、密蒙、勾栗木。其草藥又得山薑、碧百合焉。

私は嘗て石泉公の家が藏する藏書目に、『園庭草木疏』なる書が有るのを見、先達が尊ぶものには、必ずや何らかの意味があるのだと悟った。私は二十年の間、三度吳の地方を守り（浙西觀察使を指す）、一度淮河の流れる場

所に臨んだ（淮南節度使を指す）。嘉樹、芳草のたぐいには、生來眼がないたちなので、ある時は同好の士から取り寄せ、ある時は山に住む樵から得、初めは一尺程の丈だったのが、今では既に一尋に伸びている。『詩經』の學者たちが多く草木の名を知り、『離騷』を作った者が必ずや香草の美點を言い盡くしているのを感じて、私も（私が集めた草木が）採れた山や澤の名前を記し、人々の見識を廣げるのに役立ちたいと願うのである。

木で變わつたものは……（中略）……伊水、洛水の名高い園林が所有しているものは、今ここには載せない。

潘岳が「閒居賦」を賦し、郁棣がうるわしく生い茂っているのを讚え、陶淵明が我が家に歸つたとき、松や菊が變わらずあつたのを喜んだかのようにではないか。今ここにその嘉すべき名を列ねて、石の上に記すのである。

……（以下略）

一讀すると、まるで植物園のような庭園の姿が浮かび上がってくる。「草木記」と題されてはいるが、草木に限ら

ず庭園の裝飾として集められたものがずらずらと書き連ねられている。草木や石の多彩さには、配置される、と言うよりは、陳列される、と言つた方が相應しい。かくも豊かな園林の描寫は、古代に皇帝が所有した苑園である上林苑を描寫した、『西京雜記』の記事を想起させる。

初修上林苑、羣臣遠方各獻名果異樹、亦有製爲美名、以標奇麗。梨十。紫梨、青梨（實大）、芳梨（實小）、大谷梨、細葉梨、縹葉梨、金葉梨（出琅邪王野家、太守王唐所獻）、瀚海梨（出瀚海北、耐寒不枯）、東王梨（出海中）、紫條梨。棗七。弱枝棗、玉門棗、棠棗、青華棗、棗棗、赤心棗、西王棗（出崑崙山）。栗四。侯栗、榛栗、瑰栗、蟬陽栗（蟬陽都尉曹龍所獻、大如拳）。桃十。秦桃、樞桃、細核桃、金城桃、綺葉桃、紫文桃、霜桃（霜下可食）、胡桃（出西域）、櫻桃、含桃。李十五。紫李、綠李、朱李、黃李、青綺李、青房李、同心李、車下李、含枝李、金枝李、顏淵李（出魯）、羌李、燕李、蠻李、侯李。柰三。白柰、紫柰（花紫色）、綠柰（花綠色）。杏三。蠻杏、羌杏、

「猴査。棹三。青棹、赤葉棹、烏棹。棠四。赤棠、白菜、青棠、沙棠。梅七。朱梅、紫葉梅、紫華梅、同心梅、麗枝梅、燕梅、猴梅。杏二。文杏（材有文采）、蓬萊杏（東郭郡耐于吉所獻、一株花雜五色、六出、云是仙人所食）。桐三。椅桐、梧桐、荆桐。林檎十株。枇杷十株。橙十株。安石榴。棗十株。白銀樹十株。黃銀樹十株。槐六百四十。千年長生樹十株。萬年長生樹十株。扶老木十株。守宮槐十株。金明樹二十株。搖風樹十株。鳴風樹十株。琉璃樹七株。池離樹十株。離婁樹十株。白兪、陶杜、陶桂、蜀漆樹十株。栲四株。縱七株。栝十株。楔四株。楓四株。

〔西京雜記〕第一

『西京雜記』は著者が未だに定まっておらず、上の文章に關しても、遅くとも唐代にはこの部分が『西京雜記』に入れられていたであろう事しかはつきりしないようである。ともあれ、兩者とも、特權階級にのみ所有が許される、當代隨一といつて良い豪華な園林に關する記述である。集められた植物たちを列擧によつて描寫している點では共通し

李徳裕と平泉莊（二宮）

ており、量と多様さに對する贊美が兩者の間に通底していることが見て取れるだろう。珍奇なものが集められた、富と權力の象徴としての庭園の姿は、時代を超えて重なつて見えるのだ。しかし、記述の姿勢に注目すると兩者の違いもまた見えてくる。「草木記」は集めた本人による蒐集の記録であり、記述の基準や目的が文中で述べられている。

「乃ち出づる所の山澤を記し、博聞に資することを庶う。」とあるように、出自や年月の記録とその披露とを目的とし、「其の伊、洛の名園の有つ所は、今並べて載せず。」とあるように、餘人が知り得ない珍しさをことさらに重視しているのである。また、『西京雜記』の記述が、珍しさも含めた園林の豊饒を強調するために植物名とその數量とを列擧するのに對して、「草木記」の植物たちには、莊園の持つ實りの豊かさは期待されていない。「草木記」は出自や年月の記録を大きな目的とする、いわば蒐集の目録なのである。そこには整頓、分類や價值付けの姿勢は見られないものの、蒐集家が自分のコレクションをずらりと目録にして世に問うような、無邪氣な喜びと興奮が溢れている。こ

のように豊富な植物や石などは、自身が手を盡くして手に入れたものもあろうし、周囲の人々の貢献、協力によるものもあつたらう。いずれにせよ、財力や権力はもちろん、當時相當の知識や趣味を持つていないと、ここまで多彩なコレクシオンを築くことは不可能であつたはずだ。²⁰⁾

次に、彼が連作の中で詠んだ詠物詩的な石詩、植物詩の詩題を擧げてみよう。

〈石 詩〉題寄商山石〔思山居一首〕〔別集卷十〕、釣

臺石、似鹿石、海上石筍、疊浪石（以上「思

平泉樹石雜詠二十首」〔同〕）、泰山石、巫山石、

羅浮山、漏潭石、釣石（以上「重憶山居六首」

〔同〕）

〈植物詩〉紅桂樹、金松、月桂、山桂、柏、芳蓀、海裡

（以上「春暮思平泉雜詠二十首」〔同〕）、重臺芙

蓉（「思平泉樹石雜詠二十首」）

このように數多くの石詩、植物詩が見られることから、

李徳裕が思い描く平泉のイメージの中で、これらのコレクシオンがいかに重要な位置を占めていたかが分かる。「重憶山居六首」詩などを見ると、山居を思う、と言う詩題を持ちながら内容は殆ど詠物的な石詩が占めているのである。石の名前には、故事に因んだ物（釣臺石、釣石・嚴光（一名遵）の故事）、出自した場所の名を取った物（商山石、泰山石、巫山石、羅浮山）、形状による物（似鹿石、海上石筍、疊浪石）などがある。これらの石の名前を誰がつけたのかは定かではないが、「太湖石」の名前が白居易によると推測される²¹⁾

ように、李徳裕も手に入れた石に自分で名前をつけていたと言ふことは考えられるだろう。それぞれの詩を擧げて見ていこう。

釣石 於谿人處求得（重憶山居六首之六）

釣石 谿人の處に於いて求めて得

嚴光隱富春 嚴光 富春に隠れ

山色谿又碧 山色 谿 又た碧なり

所釣不在魚 釣る所は魚に在らず

揮綸以自適 綸を揮いて以て自適す

余懷慕君子 余 君子を懷慕し

且欲坐潭石 且く潭石に坐らんと欲す

持此返伊川 此を持ちて伊川に返り

悠然慰衰疾 悠然として衰疾を慰めん

嚴光は、皇甫謐『高士傳』や『後漢書』逸民傳に傳があるが、光武帝に仕官を求められても應じず、富春山で百姓をして暮らした人物である。彼が釣りをしていた場所は嚴陵瀨と名付けられ、そこには平らな石があり上に人が腰掛けられた^②という。

羅浮山 番禺連帥所遣（重憶山居六首之四）

羅浮山 番禺の連帥の遣る所

龍伯釣鼈時 龍伯 鼈を釣りし時

蓬萊一峰坼 蓬萊 一峰坼く

飛來碧海畔 碧海の畔に飛び來りて

遂與三山隔 遂に三山と隔てらる

李德裕と平泉莊（二首）

其下多長溪 其の下長溪多く

潺湲淙亂石 潺湲として亂石に淙ぐそそぐ

知君分如此 君の分此くの如きを知れば

贈逾荆山壁 贈は荆山の壁を逾えん

二句目には「裴淵廣州記、羅浮山是蓬萊邊山浮來。」五句目には「茅君內傳、山下有七十二長溪。」と注がつけられている。^③この詩は採掘された山に因んで名付けられた石を詠んだ作品だが、羅浮山にまつわる傳説などに觸れ、石の素性を讃えている。羅浮山のかからであることに價值が置かれた石は、その形狀に關しては殆ど言及されていない。同じく「泰山石」詩では泰山の偉容がまず詠われるし、「巫山石」詩では巫山にまつわる言葉がちりばめられる。山の持つ傳説、神祕性や雄大さが石にそのまま投影され、そこに價值が置かれているのである。寶石や珠などが、それ自身に人を引きつける魅力、價值を持つとは異なり、これらの石は連想によって見出された價值（隱遁者や山の持つ精神性）によって愛でられる。では、形狀から名付け

られた石はどうだろうか。

海上石笋（思平泉樹石雜詠一十首之三）

海上の石笋

常愛儂都山

常に愛す儂都山の

奇峰千仞懸

奇峰 千仞に懸かるを

迢迢一何迢

迢迢として一に何ぞ迢かなる

不與衆山連

衆山と連ならず

忽逢海嶠石

忽として海嶠の石に逢い

稍慰平生憶

稍く平生の憶いを慰む

何以似我心

何を以て我が心の

亭亭孤且直

亭亭として孤且つ直なるに似ん

「海嶠石」は儂都山（浙江縉雲縣）のミニチュア、投影として、李德裕の心と儂都山とを結ぶ役割を果たしており、ここでも石は媒介としての役割を託されている。詩題に「海上の石笋」とあるが、恐らく水上に建てられた大きな山形の石なのであろう。この石は儂都山より得られたとい

うわけではなく、石の形が「奇峰」である儂都山に似ていたことから見立てられたのだろう。

形状から名付けられたと思われる石は、多く「奇」という文字で表現される。「似鹿石」（思平泉樹石雜詠一十首之二）では「林中に奇石有り、獸の潛行するに髣髴たり。」、「疊浪石」（思平泉樹石雜詠一十首之四）では「潺湲たり桂水の湍、漱ぎし石に奇狀多し。」と詠われている。形状そのものに價値が置かれているこれらの石は、「奇」という表現でもって愛でられる。

同時代においては、白居易、牛僧孺らの太湖石愛好が有名であり、當時石を集めて賞玩するという趣味が流行していたことが窺える。彼らはその唱和詩の中で、太湖石の「怪」であり「奇」であり「醜」である形状を、新しい價値の發見に興奮したかのように長々と描寫している。太湖石は典故となる傳説を何ら背負っておらず、ひたすらその形状からイメージがふくらまされ、描寫される。中でも白居易は太湖石を詠んだ詩を數首作り、「蒼然たり兩片の石、厥の狀怪且つ醜。俗用に堪うる所無く、時人嫌いて取らず。

……人皆好む所有り、物各おの其の偶を求む。漸く恐れる少年の場の、垂白の叟を容れざるを。頭を廻らし雙石に問う、能く老夫を伴うや否やと。石言う能わざると雖も、我の三五と爲すを許す。」〔雙石〕詩二二〇六・卷二二）、「天姿信に異と爲し、時用任せる所に非ず。刀を磨くに礪に如かず、帛を擣つに砧に如かず。何ぞ乃ち主人の意の、之を重んじること萬金の如からんや。豈に伊れ造物者の、獨り能く我が心を知るか。」〔太湖石〕詩二二八一・卷二二二と、太湖石の價值を、自分にしか理解し得ないものであり、また自分を理解してくれる點にある、として賞賛している。奇怪な形狀を精神性にまで昇華させ、「不器用な我」に寄り添うものとして共感、一體感を生み出している。

ほとんど太湖石にのみこだわった白居易らと、種類を集めることを重視した李徳裕とは、蒐集という行爲に關しても一線を畫しているが、詩をみても、そのような態度の違いは表れている。もちろん双方とも石を詩に詠むことによつて石への愛着、愛情を表現しており、石を珍重する姿勢には變わりがない。しかし、白居易の思い入れたっぷりの

石詩と比べると、李徳裕には、自分の心に寄り添うものとして「何を以て我が心の、亭亭として孤且つ直なるに似るや。」〔海上石笋〕などという表現は見られるものの、詩全體の流れから見ると、非常にあつさりした結句のように感じられる。李徳裕の詩は、石の新たな價值を獨自に創り出そうとする譯ではなく、描かれる價值は山の聖性や隱逸者の故事に由来している。李徳裕にとつての石の價值とは、傳統的な價值觀の枠組みの中に存在しているものなのであり、李徳裕は詩を通してその既存の價值の中に身を置いて楽しんでいたのである。こうしてみると、李徳裕の石たちはあくまでコレクションの一部であり、白居易のそのように、隱逸生活のパートナーとしての關係が結ばれているわけではないと言える。李徳裕は、石の新たな價值を詩によつて發見、表現することよりも、様々な種類の石を取り上げて詩を作ることに重點を置いていたように見える。これは、「草木記」にとりどりの石をずらりと並べてみせたのと通じる態度であると言えよう。

これらの詠石詩には、詩題注にどこの誰から貰ったかを

記したものが多く、「羅浮山」詩の最後の二句のように、贈り物としてどれだけ素晴らしいかを言う句も見られる。詩が石を贈ってくれた者への感謝のしるしとして作られていたことを豫想させるが、このようなことも内容に切實さを缺く一因となっているだろう。

次に植物詩を見てみよう。

紅桂樹 此樹白花紅心、因以為號。(春暮平泉雜詠二十

首之六)

紅桂樹 此の樹白花にして紅心、因りて以て號と爲す。

欲求塵外物 塵外の物を求めんと欲す

此樹是瑤林 此の樹 是れ瑤林なり

後素合餘絢 後素 餘絢に合し

如丹見本心 丹の如く本心を見わす

妍姿無點辱 妍姿 點辱無く

芳意託幽深 芳意 幽深に託す

願以鮮葩色 願わくは鮮葩の色を以て

凌霜照碧潯 霜を凌ぎて碧潯を照らさん

紅桂樹は、莽草という植物の別名とされることもあるよう

だが、次に引く詩の題によると、李徳裕は別の植物だとみ

なしていたようである。ここでは、仙界に生えているよう

な高潔で美しい植物、瑕瑾のない美しさを持ったものとし

て描かれている。この「紅桂樹」は李徳裕が特に執着した

植物だったらしく、「比ごろ龍門の敬善寺に紅桂樹有りて

獨り伊川に秀ずるを聞き、嘗て江南の諸山に於いて之を訪

うも致す莫し、陳侍御 余の好む所を知り、因りて剡溪の

樵客を訪い、偶たま數株を得て郊園に移植す、衆芳色沮^あせ、

乃ち知る敬善に有る所は是れ蜀道の蔞草にして徒らに嘉名

を得しのみかと、因りて是の詩を賦して兼ねて陳侍御に贈

る 金陵の作「別集卷九」という長い詩題を持つ作品中で

も、

昔聞紅桂枝 昔聞く紅桂の枝

獨秀龍門側 獨り龍門の側に秀でしを

越叟遺數株 越叟 數株を遺すも

周人未嘗識 周人 未だ嘗て識らず

平生愛此樹

平生此の樹を愛し

攀翫無由得

攀きて翫ばんとするも得るに由し無し

君子知我心

君子我が心を知り

因之爲羽翼

之に因りて羽翼を爲す

……

芬芳世所絕

芬芳 世に絶する所

偃蹇枝漸直

偃蹇 枝漸く直なり

瓊葉潤不凋

瓊葉 潤いて凋れず

珠英粲如織

珠英 粲として織の如し

猶疑翡翠宿

猶お翡翠の宿るかと思ひ

想待鸕雛食

鸕雛の食すを待つを想う

寧止暫淹留

寧んじ止まりて暫く淹留せよ

終當更封植

終に當に更に封植すべし

と、常々紅桂樹に強い關心を抱き手に入れたいと願つていたことや、その玉や寶石のような美しさを讃えている。詩は、手に入れた紅桂樹を植えてよう、と結ばれる。

上の詩にも表れているように、李徳裕は世に知られてい

李徳裕と平泉莊（二宮）

ない珍しい植物を手に入れるのにとりわけ熱心だった。

「金松」という植物を手に入れた経緯に關しても、「金松賦 並序」〔別集卷九〕という作品が残されている。賦の序には、顔太師猶子なる人物の舊宅であり、昔孔融の臺榭があつたという土地に遊んだとき、庭に植えられていた金松という珍しい植物を見つけ、主人に求めて平泉に並べたこと、その枝葉が今では盛んに茂っていると聞いたことが述べられる。本文では、

美珍木之在庭、得嘉名於樵客。曩擢本於台嶺、近徙根於簷隙。其柯肅肅、可比於眞松。其葉纖纖、寔侔於瞿麥。……奇樹以垂珠而擅名、金松以潛穎而莫覩。亦猶處子在於隱淪、奇才遺於草澤。……庶封植於園林、永愛翫而無斁。

珍木の庭に在るを美し、嘉名を樵客に得。曩に本を台嶺より擢きて、近ごろ根を簷隙に徙す。其の柯肅肅として、眞松に比ぶべし。其の葉纖纖として、寔に瞿麥に侔じ。……奇樹は珠を垂るるを以て名を擅にし、金

松は穎を潛ますを以て覲うこと莫し。亦た猶お處子の隱淪に在りて、奇才の草澤に遺らるるがごとし。……園林に封植するを庶こいねがう、永とこしえに愛翫して敦いとうこと無からん。

と、金松を手に入れた經緯とその美しさを描寫している。

この「金松」に關しては、「春暮思平泉雜詠二十首」〔別集卷十〕の中でも取り上げられ、「台嶺 奇樹を生じ、佳名世 未だ知らず。」と詠われている。

これらの詩賦には手に入れた珍しい植物を平泉に移植したことが詠われているが、唐代に作られた植物を取り上げた詩には、「移地栽」「栽」などの詩題・語句を持つ、個人による植物の移植を取り上げた詩が多く見られ、このような行爲が唐代にはある程度一般化していたことが窺われる。李徳裕と同時代、中唐において植物の詩を多く作つた詩人と言へば、造園にも熱心であつた白居易がまず第一に挙げられるが、白詩にも李徳裕と同様、珍しい植物を「發見」して詠んだ詩が幾つか見られる。例えば忠州刺史の時に作られた「木蓮樹生巴峽山谷間、巴民亦呼爲黃心樹。大

者高五丈、涉冬不凋、身如青楊有白文、葉如桂、厚大無脊。花如蓮、香色豔膩皆同、獨房藥有異。四月初始開、自開迨謝僅二十日。忠州西北十里、有鳴玉谿、生者穠茂尤異。元和十四年夏、命道士毋丘元志寫。惜其遐僻、因題三絕句云。」詩（一一一六―一一九・卷一八）は、李徳裕の詩と同様、世に知られていない植物を取り上げており、「紫陽花」詩（一四〇四・卷二〇）では、自分が發見した花に名付けよう、と詠っている³³。しかし、平泉に植物を集めることに熱心だつた李徳裕に對して、白居易は自分が今いる場所に彩りを添えるために栽培を樂しんでいたようである。白居易には赴任地に植えた植物を詠む詩が多く殘されており、たとえば江州では、櫻桃、杉を植える詩が見られる。一首引いてみよう。

移山櫻桃（〇九一九、卷一六）

山櫻桃を移す

亦知官舍非吾宅

亦た官舍の吾が宅に非ざるを知るも

且斷山櫻滿院栽

且く山櫻を斷りて院に滿ちて栽えん

上左 近來多五考 上左 近來 五考多く

少應四度見花開 少くとも應に四度は花の開くを見る

べし

この詩は、植樹＝根付かせるといふ行爲の表す土地へ親しもうとする氣分と、江州司馬として左遷されてこの地にある事への不満が交錯した、短いながらも複雑な感情を描いている。年が改まる毎に花をつけ樂しませてくれる草木は土地への愛着を生み出すものであり、同時に年月が過ぎ去る事への感懷を引き起こすものでもあるのだ。官舎にいて自身の樂しみのために植物を植えるといふ行爲は、白居易が赴任先で池を造り周圍を整えて、自身が居心地よく過ごすための努力を惜しまなかつたことと關わりがあるだろう。白居易は、多く自分のいる環境に働きかけるものとして、植物の移植を扱うのである。同じ時代に植物に關心を寄せた二者だが、「草木記」に表れているように、減多に歸せことのできなかつた平泉に次々と珍しい植物を集めた李徳裕と、その土地毎に植物を植えて樂しんだ白居易とは、

李徳裕と平泉莊（二宮）

明確な態度の違いがあつたと言つていいだろう。

李徳裕の詠物的な詩には、對象を手に入れた喜びや、その美しさ珍しさを稱える表現は見られるもの、白居易らの詩人が植物を詠む詩によくでてくる、變化に對する感情、すなわち開花のめでたさや落花の哀愁などは描かれない。もちろん、平泉を描いた李徳裕詩の中には、この目で見られない満開の花を惜しむ詩など、植物の盛衰から感じられる時の動き、季節の移り變わりを意識した作品も見える。しかし、これらの珍しい植物を取り上げて詠んだ詠物的な詩のテーマは、彼らの變わることのない價値の確認、稱揚なのであり、その點において、先に觸れた石詩と詩作の姿勢は同じであると言える。

このような李徳裕の植物に對する態度を見るときに參考になるのが、同時代李徳裕と個人的付き合いが有つたとされる段成式（？―八六三）による『西陽雜俎』である。續集卷八「支動」卷九「支植」には、「衛公曰……」として、李徳裕から聞いた植物に關する知識が書かれている條が多くある。④その中には、平泉莊にあつた植物のことや、繪や

書物から得た、または直接見聞した珍しい植物や動物の知識が書かれており、李徳裕の博學ぶりを見ることが出来る。もう一つ参考になるのが、植物を詠んだ連作の平泉詩につけられており、植物の特徴を紹介する役割を果たしている詩題注である。「金松」詩には「天台山より出で、葉は金色を帶ぶ」、「柏」詩（春暮思平泉雜詠二十首之十）には、「別樹霜を経て暫く紅なるに、惟だ此の柏のみ枝葉盡く丹にして、四時一色なり。」「芳蓀」詩（同十一）には「茅山の東溪に生じ、陶隱居 之れを溪蓀と謂う。花紫色にして、淺水の中に生ず。」などである。これらの詩題注が有ることによって、植物の外観の特徴、性質を知ることが出来るのだが、逆に言えば、これらの植物は詩題注がなければイメージできない程一般には見られないものであったということになる。個々の詩は、これまでの詩作では対象になり得なかつた珍しい植物を描いているのである。これら『酉陽雜俎』と詩題注という二つの記述において、李徳裕は観察や情報収集の結果説明、報告をしているのであって、そこで語られていることは、文學とは異質のものである。

植物を捉えるときに、詩賦だけでなくこのような描寫を多く用いたということも、李の植物に對する態度を、特徴づけるものと言えるだろう。

李徳裕にとつて、美しいものを愛でる心と廣範な知識を求める心、兩方を満足させられる趣味として植物の蒐集があった。そして、そのようにして蒐集品を得た時の獲得の喜びや、蒐集品に對する愛着が、詩作の原動力になつていたのでないだろうか。

このような、李徳裕のまず蒐集ありきと言つた詩作の態度は、植物を描く詩における新しい動きであつたといえるかも知れない。五言八句の中に收められた詩を見ていくと、蒐集家のスケッチをめくつていような印象を受け、石詩と同様に植物詩も、蒐集家としてコレクションに言及しようとする視點で描かれている。「草木記」の植物、石の列擧と、これら一連の植物、石詩とは、李徳裕の蒐集欲、知識欲を表すものであるともいえるだろう。

李徳裕は、平泉をより美しく、居心地良く整備するため、造園家のような立場から植物を集めて植えたのではな

く、貪欲な蒐集家として、陳列するためのコレクションである多くの植物を集めた。世に知られていない珍しきや非日常的な美しさ、善き性質に価値が置かれる特別な植物たちは、生きた寶石として扱われる。同じコレクションでも、何かの體現者として、いわば媒介としての価値をもつ石たちと植物とは、この点において違いを見せていると言つても良いかも知れない。いずれにせよ、李徳裕がそれぞれに愛着を持つていたことは確かであり、かくも豊富な蒐集品は、彼の平泉に對する情熱や執着の一端を擔つていた。平泉は、美しい風景と共に想起される庭園、のどかな田園を持つた慕わしい「故郷」であると同時に、石や植物で彩られた——言い換えると、これらのコレクションがずらりと「陳列」された——ものに溢れた庭園という側面も、持つていたのである。

(2) ものへの執着

平泉で暮らすという望みを満足いく形で叶えられなかつた李徳裕は、子孫へ向けて「平泉山居戒子孫記」〔別集卷

九〕をのこしている。その中には、結局は平泉に行き着けないという諦観と、平泉に對する強い執着が、現世的な感覺の中でむき出しになっている。既に引用した前半部分には、自分がいかに平泉を手に入れ、整備したかが述べられていた。文章はその後、人の出處進退は道を失わず、節度を失わないことが大切だと述べ、老子や柳下惠などの例を挙げた後、こう續く。

矧吾者、於葵無衛足之智、處雁有不鳴之患。雖有泉石、查無歸期、留此林居、貽厥後代。鬻平泉者、非吾子孫也。以平泉一樹一石與人者、非佳也。吾百年後、爲權勢所奪、則以先人所命、泣而告之。此吾志也。

「詩」曰、「維桑與梓、必恭敬止」。言其父所植也。昔周人之思召伯、愛其所憩之樹。近代薛令君於禁省中見先祖所據之石、必泫然流涕。汝曹可不慕之。唯岸爲谷、谷爲陵、然已焉、可也。

私などは、葵のように自分の根を守る知恵もなく、雁のように鳴かないで災いを呼ぶ始末である。²⁶ 自分の山水

を持つていても、考えてみると歸る機會も無い。この住まいをこのままにとどめるのは、これを子孫に残すのである。平泉を賣つたりする者は、私の子孫などではない。平泉の一木一石でも人に與えたりするのは、善き行いとは言えない。私が死んでから百年後、權勢に任せた者から奪われることにでもなれば、先祖の命じたことを、泣いて彼に訴えよ。これが私の願ひである。

『詩經』に「この桑の木と梓の木は、必ずや敬わずにはいられない。」とある。これは父親が植えたものだからそうなのだ。昔、周の人は召伯を慕い、彼がその下で休んだ木を敬愛した。最近では薛令君が、宮中で先祖が跪いた石を見ては、いつも滂沱の涙を流していた。③お前たちもこのような態度を慕わずにいられようか。水邊の地が谷になり、さらにその谷が丘になるくらいの大きな變化が世の中に起こつたら、その時は平泉の經營を手放しても良いだろう。

恐らくこの文章は、もはや平泉に戻れる見込みが無くなつ

た状況下に書かれたのだろう。文中には現世への未練が強く表され、死んでから後の自分の所有物の行く末をなお氣にかけている。先祖を敬えという大義と、ごく個人的な願望が入り混じつた文章は、ひどく切實である。

李徳裕がこのように後代へ言い聞かせたのは、當時の社會的背景も關係していたようである。玉井是博「唐時代の土地問題管見（第三回完結）④」第二章第二節では、唐代中期頃、均田制の崩壊と共に莊園の設置が王公百官によつて盛んに行われたこと、またその莊園が賣買貼典の對象ともなつていたことに觸れ、更にこう述べる。「……従つて莊園の間にも兼併を免れることが出来なかつた。殊にその子孫に不肖の者が出る時には父祖の代に設置した莊園も忽ち權勢あるものに兼併されるのを常とした。」（七六八頁）。また、同文中では北宋・孫光憲（九〇〇？—九六八）『北夢瑣言』卷三にある「唐咸通中荊州有書生、……常謂人曰、不肖子弟有三變、第一變爲蝗蟲、謂鸞莊而食也、第二變爲蠶魚、謂鸞書而食也、第三變爲大蟲、賣奴婢而食也、三食之輩、何代無之。」という記事を引用し、「不肖の子弟」が食

うために親の莊宅を賣り拂うことがよく行われていたことを指摘する。そして、「既にこの頃には子孫の爲めに莊園を設置することが貴人の間に行はれたこと、及び父祖の莊園を頼む所の不肖の子弟が酒色に耽つて終にはその莊園を失ふ者の多かつたことがこれによつて十分偲ばれる。」(七六九頁―七七〇頁)と指摘している。

このような背景があることを鑑みると、李徳裕の心配があながち杞憂ではなかつたことが分かる。しかしそのことを差し引いても、ものや場所にこれほどまでに執着するということとは、決して褒められる態度ではなかつたはずである。歐陽修(一〇〇七―一〇七二)『集古錄跋尾』では、李徳裕のこの執着に對して、

……以此知君子宜慎其所好。蓋泊然無欲、而禍福不能動、利害不能誘、此鬼谷之術所不能爲者、聖賢之高致也。其次簡其所欲、不溺於所好、斯可矣。若徳裕者、處富貴招權利、而好奇貪得之心不已、或至疲敝精神於草木、斯其所以敗也。其遺戒有云、壞一草一木者非吾子孫、此又近

李徳裕と平泉莊(二宮)

乎愚矣。

(鬼谷子の説得術について述べて)これによつて、君子たる者はその嗜好を慎むべきことが分かる。淡々として無欲であれば、禍福によつて動かすことも出来ず、利害によつて誘惑することも出来ないだろう。これこそ鬼谷子の術が効かない者であり、聖人賢者として最も素晴らしい者である。その次に、欲するところを簡素にし、嗜好に溺れないのも、まあ良いと言える。李徳裕はと言えば、富貴にあつて利權を招き寄せ、奇を好み貪欲な心は盡きることなく、草木に精神を消耗させるまでになつてしまつた。これが彼が失敗した理由なのである。子孫に戒めを遺して、一草一木を損なう者はわが子孫にあらずとまで言つたのは、これはもう殆ど愚に近いではないか。と、李徳裕が宣宗の代に替わつてから左遷を繰り返し、不遇のままに終つた理由を、草木に溺れたせいだと断定し、いささか厳しすぎると思える見解を記している。歐陽修にとつて、李徳裕の蒐集趣味とその執着は、一刀のもとに斬

り捨てられる悪癖だったのである。「好むところに溺れる」ことは、士大夫のありようとして、決して褒められたものではなく、人生の末路と結びつけて非難されさえするものだった。

石や植物を大量に集めることは、當時の特権階級にしか許されない金のかかる趣味であり、そこには利権がらみの噂もつきまといはざらずである。人々はそのコレクションの多さや、そこに注がれた労力や金、つまり物質的な面のみ注目しがちであるし、彼らのそのような視線は容易に毀譽褒貶を引き起こす。しかし李徳裕のコレクションは、富を誇示する手段というよりかは、「性の耽する所」に従って、美しいものや珍しいものはなるべく網羅したいという欲求や、新しい知識への欲求を充たした結果としてあったのではないだろうか。

これだけ多くのものを集め、またその記録を取ることも熱心であった李徳裕だが、後の士大夫たちに受け継がれるような新しい精神的價値を築くことはなかった。その點では李徳裕は、集めたものの價値付けを存分に行えたとは

言えない。ある意味、李徳裕は、「蒐集という行爲を表現すること」に無自覺だったといえるだろう。しかし、「一木一石と雖も人に與えるな」と言う子孫への遺言、場所のみならず蒐集品にまで細かい指示を與えずにはおられなかった切實な願いには、蒐集品を残して死んでいかざるを得ないコレクターの悲哀、叶えられなかった望みのその分だけ強まった、人間の執念のようなものが顯れている。

一族に縁の深い洛陽付近の平泉に造られた平泉莊は、李徳裕にとって、収入源となる莊園であり、歸るべき故郷でもあった。また同時に豊かな自然と田園風景を持った隱遁の地であり、珍しい石や植物が集まる博物館でもあった。しかし、このように様々な意味を持った平泉という土地に、李徳裕は結局歸ることが叶わなかった。故に、美しい「故郷」の風景の陰には常に現實という重しが置かれており、蒐集欲に任せたコレクションには斷ち切りがたい執着が付着している。平泉の詩文からはこのように、理想や欲望が集結した園林の姿が浮かび上がってくる。平泉莊という園

林の姿を追うことによつて、唐代一士大夫の理想と現實もまた、浮き彫りにされるのである。

註

① 本論文中に引く李德裕詩は、傅璇琮・周建國校箋『李德裕文集校箋』（河北教育出版社、二〇〇〇年）を底本とし、引用部分に卷數を附す。また、李德裕の事績については傅璇琮『李德裕年譜』（河北教育出版社、二〇〇一年）を参考にした。

② 白居易詩には、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九七四年）による作品番號と、朱金城校『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年）による卷數を付す。

③ この時代の土地所有制度の變化については、加藤繁しげ『唐の莊園の性質及其の由來について』（同著『支那經濟史考證上』東洋文庫、昭和二七年所收。原載『東洋學報』七の三、大正六年）同「唐宋時代の莊園の組織並に其の聚落としての發達に就きて」（同上、原載『狩野教授還曆記念支那論叢』、一九二八年）などに詳しい。

④ 前出「唐の莊園の性質及其の由來について」には「要するに唐代の「別莊」——特に城外の別莊には廣大な耕地を包含したものの多かつたことを認めねばならぬ。李德裕の平泉莊などには耕地に就いての傳へはなければ、既に周圍十餘

里の大地面である以上は、其中に生を養い死を送るに困まないだけの収入の資源は存在したのであらうと察せられる。」（三二一頁）とある。

⑤ この本で周氏は、李德裕の平泉莊は莊園に附屬したものであると考えておられるようだが、本論では注④の部分で述べたような理由と、李德裕の作品中に平泉の田園風景が描かれていることなどから、平泉莊には莊園も附屬していたものと考ええる。

⑥ ここで挙げられているのは殆ど中唐以降の例であるが、園林の歴史を辿る上で特に中唐に重きを置いているのが、王毅『園林與中國文化』（上海人民出版社、一九九〇年）である。第一編「中國古典園林發展要略」第六章「中唐至兩宋園林」の冒頭では、詩のみならず他の多くの藝術面において中唐は轉機であり、現在の明清園林は中唐、兩宋園林の流れを汲むと述べている。これは、中唐以降園林が「壺中天」、すなわち小が轉換して大になる、という空間形成を基礎におくようになった、という考え方に基づいている。

尚、園林史の研究狀況に關しては、田中淡編『中國造園史文獻目錄』（東洋學文獻センター叢刊六冊、一九九七年）を参照させていただいた。

⑦ 『李德裕文集校箋』に載せる「諸書載平泉花木」より引用（校箋では『太平廣記』を用いて校勘している）。句讀は少し變えたところがある。

- ⑧ 『校箋』では、外集卷九、一〇にまとめられた平泉に関わる詩文の制作年代を、多く文集の配列順に據つて確定しているが、根據としては確實ではないと判断し、參考に留めた。
- ⑨ 李德裕の詩には、このように詩題注が付けられていることが多々ある。『校箋』ではこれを制作年代特定の根據としているが、詩題注のみを根據に制作年代を決定するには疑問が残る。
- ⑩ 『舊唐書』卷一七一四 李德裕傳、「同」卷一七三 李紳傳に見える。なお、この時の禍根を牛李の黨争の開始期と見なす説もある。牛李の黨争に關しては、渡邊孝「牛李の黨争研究の現状と展望——牛李黨争研究序説」(『史境』二九、一九九四年)が、黨争に關する様々な説を整理して紹介しており、諸説入り亂れている研究状況の全體を掴むのに便利である。
- ⑪ 詩題にある「圖」は、白居易「題洛中邸宅」詩(二五六四・卷二五)に、「試問池臺主、多爲將相官。終身不會到、唯展宅圖看。」とあるこの「宅圖」(屋敷の設計圖)と同じようなものを指すと思われる。因みに、劉禹錫「和浙西李大夫伊川卜居」詩では、「按經修道具、依樣買山村。(馬高唐爲御史大夫、將置宅、命畫工圖其狀、戒所使曰依此樣求之。)開鑿隨人化、幽陰爲律暄。遠移難得樹、立變舊荒園。」と詠われている。
- ⑫ 邑有桐鄉愛・『漢書』卷八九循吏傳「朱邑字仲卿、廬江舒人也。少時爲舒桐鄉畜夫、廉平不苛、以愛利爲行、未嘗笞辱人、存問耆老孤寡、遇之有恩、所部吏民愛敬焉。……初邑病且死、屬其子曰「我故爲桐鄉吏、其民愛我、必葬我桐鄉。後世子孫奉嘗我、不如桐鄉民。」及死、其子葬之桐鄉西郭外、民果共爲邑起家立祠、歲時祠祭、至今不絕。」
- 山餘黍谷暄・『太平御覽』卷八四二引漢劉向「別錄」傳言鄒衍在燕、有谷地美而寒、不生五穀。鄒子居之、吹律而溫至生黍、到今名黍谷焉。〔論衡〕寒溫にも同様の話有り)
- ⑬ 故侯・『史記』卷五十三 蕭相國世家「召平者、故秦東陵侯。秦破、爲布衣、貧、種瓜於長安城東。瓜美、故世俗謂之「東陵瓜」。」
- 逃相・『古烈女傳』楚於陵妻「……楚王聞於陵子終賢、欲以爲相、使使者持金百、欲往聘迎之。於陵子終曰、僕有箕箒之妾、請入與計之。……于是子終出謝使者而不許也。遂相與逃而爲灌園。……」
- ⑭ 『校箋』は、制作年代を開成五(八四〇)年とほぼ断定している『平泉山居草木記』(本文中の年代や、歐陽修『集古錄跋尾』に記された年代による)と同時代の作であろう、と推定している。また、その内容から、少なくとも晩年に近付いてから作られたと考えられる。
- ⑮ 班生之宅・班固「幽通賦」(『文選』卷一四)「終保己而貽則兮、里上仁之所廬。」李善注「……里、廬、皆居處名也。言我父早終、遺我善法則也。何謂善法則乎。言爲我擇居處也。」

孔子曰、里仁爲美。」

應叟之地…任昉「齊竟陵文宣王行狀」(『文選』卷第六〇)

「邙山洛水、協應叟之志。」李善注「應璩與程文信書曰、故求遠田、在關之西。南臨洛水、北據邙山。託崇岫以爲宅、因茂林以爲蔭。」

①⑥ この「平泉山居戒子孫記」と、後に引く「平泉山居草木記」については、陳植、張公弛選注、陳從周校閱「中國歷代名園記選注」(安徽科學技術出版社、一九八三年)の注を参考にした。

①⑦ 陳寅恪「論李棲筠自趙徙衛事」(『金明館叢稿 二編』所收)に、李德裕の祖父李棲筠が趙郡から洛陽に移り住んだこと、また、河北地方に住んでいた山東士人たちが、安史の亂以後、胡化、藩鎮化した區域を避け、祖先の墓を放棄して長安や洛陽といった政治の中心地に墓地を移した事が述べられている。李德裕の一族が洛陽郊外に埋葬されたことについては、「年譜」「李德裕家世」に詳しい。

①⑧ 「李德裕年譜」によると、李德裕が平泉を訪れる機會があったと思われる時期は、開成元(八三六)年、九月—十二月、太子賓客分司東都時、開成五(八四〇)年秋、淮南節度使から宰相となり入京する途上、會昌六(八四六)年十月—大中原(八四七)年、太子少保、分司東都時(この後潮州司馬、崖州司戸參軍と左遷され、崖州で卒す)の三回。

①⑨ 「漢書」卷六武帝紀(元鼎)三年冬、徙函谷關於新安。

李德裕と平泉莊(二宮)

以故關爲弘農縣。」師古注應劭曰「時樓船將軍楊僕數有大功、恥爲關外民、上書乞徙東關、以家財給其用度。武帝意亦好廣關、於是徙關於新安、去弘農三百里。」

②⑩ 因みに、劉禹錫の唱和詩「和李相公初歸平泉過龍門南嶺遙望山居卽事」では、「暫別明庭去、初隨優詔還。……巖廊人望在、只得片時閑。」と、「優詔」と喜びつつも「片時閑」と結んでおり、表面上の意味においては李詩の持つ感慨と寄り添っているとはいえない。このことから、李德裕の置かれた狀況が推測できる。

②⑪ 陶淵明「歸去來兮辭」「僮僕歡迎、稚子候門。」

②⑫ 皇甫謐「高士傳」卷中、張仲蔚「張仲蔚者、平陵人也。與同郡魏景卿俱修道德、隱身不仕。明天官博物、善屬文好詩賦、常居窮素、所處蓬蒿沒人。閉門養性、不治榮名、時人莫識、唯劉襲知之。」

②⑬ この連作の成立年代に關して、「校箋」は、歐陽修「集古錄跋尾」卷九に「李德裕平泉山居詩開成五年」という記載があることを指摘している。

②⑭ 「暫」は、「校箋」では「暫」に作るが、意味を取りにくいので、「四庫全書」本、「全唐詩」に従った。

②⑮ 石泉公は、「中國歷代名園記選注」によると、則天武后時の宰相で、石泉縣子に封ぜられた王琳(字方慶、「新唐書」卷一一六に傳有り)。彼の撰による「園庭草木疏」一二卷は、「新唐書」藝文志に著録有り。

②⑥ 西野貞治「西京雜記の傳本について」(『人文研究』三二七、昭和二七年)

②⑦ 當時の石を集める趣味に關しては、白居易「太湖石記」に、「先是、公之僚吏多鎮守江湖、知公之心惟石是好、乃鈎深致遠、獻瑰納奇、四五年間、纍纍而至、公於此物、獨不廉讓。東第南墅、列而置之。」とあり、こちらも當時の權力者であった牛僧孺に、周圍の者が我先に奇石を獻じたことが記されている。また、姚合(七八一?—八四六)「買太湖石」(『全唐詩』卷四九九)詩は、「我曾遊太湖、愛石青嵯峨。波瀾取不得、自後長咨嗟。奇哉賣石翁、不傍豪貴家。負石聽苦吟、雖貧亦來過。貴我辨識精、取價復不多。」と、高價で手に入れた太湖石を手に入れた喜びを詠っている。

②⑧ 田治六郎「太湖石」(『造園雜誌』一一(一)、一九四八年)

②⑨ 『後漢書』卷八三逸民傳 嚴光「嚴光字子陵、一名遵、會稽餘姚人也。少有高名、與光武同遊學。及光武即位、乃變名姓、隱身不見。……除爲諫議大夫、不屈、乃耕於富春山、後人名其釣處爲嚴陵瀨焉。建武十七年、復特徵、不至。年八十、終於家。」李賢注顧野王輿地志曰「七里瀨在東陽江下、與嚴陵瀨相接、有嚴山。桐廬縣南有嚴子陵漁釣處、今山邊有石、上平、可坐十人、臨水、名爲嚴陵釣壇也。」

③⑩ 『太平御覽』卷四一地部六 羅浮山に引く裴淵「廣州記」には、「山之陽有一小嶺、云蓬萊邊山浮來著此、因合號羅浮山。」と有る。また、『太平御覽』同項、『藝文類聚』卷七山

部上 羅浮山に引く「茅君內傳」には注の該當個所はなく、同項に引く『羅浮山記』に「舊說羅浮高三千丈(『御覽』作「高三千丈長八百里」)有七十石室(『御覽』作「七十二石室」)七十二長溪。」と有る。

③⑪ 一句目「列子」湯問「龍伯之國、有大人。舉足不盈數步而暨五山之所、一釣而連六鼈。……」五山を支えていた鼈を龍伯が釣り上げた故事を踏まえる。

③⑫ 白居易の詠花詩に關する研究に、埋田重夫「白居易詠花詩論序說——江州司馬以前を中心として——」(『早稻田大學大學院文學研究科紀要 別冊第十冊 文學・藝術學編』一九八三年)、同「白居易詠花詩論考——江州司馬以後を中心として——」(『同 別冊第一一冊』一九八四年)がある。

張壽祺「從白居易詩文看唐代園林植物的栽培和護理」(『農史研究』第三輯、一九八三年)は、白居易の植樹詩を取り上げ、觀賞のための新しい植物を見つけた例(木蓮樹生巴峽山谷間……因題三絕句云「詩」)や、植物を遠方から移植していた例(「嘉慶李」詩、「喜山石榴花開」詩など)を舉げる。

③⑬ 「木蓮樹」詩其一「如折芙蓉栽旱地、似拋芍藥挂高枝。雲埋水隔無人識、唯有南賓太守知。……其三「幾度欲移移不得、天教拋擲在深山。」

「紫陽花」詩「何年植向仙壇上、早晚移栽到梵家。雖在人間人不識、與君名作紫陽花。」

③④ 例えば、卷九支植上「衛公又言、衡山舊無棘、彌境草木無有傷者。曾泉知江南、地本無棘、潤州倉庫或要固牆隙、植薔薇枝而已。(衛公(李德裕)が、さらに、こういった。衡山には、もとから棘がなく、全域の草木は、傷のあるものがない。かつて、江南の行政を擔當したとき、その地はもともと棘がないので、潤州の倉庫や、あるいは警固を必要とする牆隙には、薔薇の枝を植えたのである。)また、「衛公言、三鬣松與孔雀松別。又云、欲松不長、以石抵其直下根、便不必千年方偃。(衛公(李德裕)によると、三鬣松と孔雀松とは別である。さらに、その話によると、松をのばしたくないときは、石をその直下の根にあてておけば、千年たつていなくても倒れ臥す。)(本文は中華書局本、譯は今村與志雄譯注『酉陽雜俎』東洋文庫四〇四、平凡社、一九八一年による)。

段成式の父段文昌は、李德裕の父李吉甫、また、德裕自身ともつきあいがあつた。段成式と李德裕の関係については、『年譜』に、大和元年李德裕浙西觀察使の時、その幕下に段成式がいたという記事が、『酉陽雜俎』續集卷四にあることを指摘している。また、今村與志雄氏は東洋文庫本所收の「段成式年表」で、會昌六(八四六)年、李德裕が荆南節度使の時、段成式はその下で記室をつとめていたという記事が『雲溪友議』上「巫詠難」にあることを指摘している。同「解説」では、「段成式は、李德裕の下で在職したことがあ

李德裕と平泉莊(二宮)

- り、また、李德裕の草木花石にわたる趣味のゆたかさに私淑していたようである。(三四九頁)と述べている。『校箋』の「新補李德裕佚文佚詩」には、左遷先の崖州から書かれた「與段成式書」が収録されている(『北夢瑣言』卷八より)。
- ③⑤ 『中國歷代名園記選注』「查」作「杏」。
- ③⑥ 衛足之智…「春秋左氏傳」成公一七年「後仲尼曰、鮑莊子之知不如葵、葵猶能衛其足。」杜預注「葵傾葉向日、以蔽其根、言鮑牽居亂不能危行言遜。」
- ③⑦ 「不鳴之患…「莊子」外篇山木「夫子出於山、舍於故人家。故人喜、命豎子殺雁而烹之。豎子請曰「其一能鳴、其一不能鳴、請奚殺。」主人曰「殺不能鳴者。」
- ③⑧ 『舊唐書』卷七三 薛收傳子元超「中書省有一盤石、初、道衡爲內史侍郎、嘗踞而草制、元超每見此石、未嘗不泫然流涕。」(『新唐書』卷九八にも同様の記述有り) 薛元超が祖父薛道衡にゆかりの石を見て涙を流した話を指す。
- ③⑨ 『史學雜誌』第三三編第一〇號、大正一一年